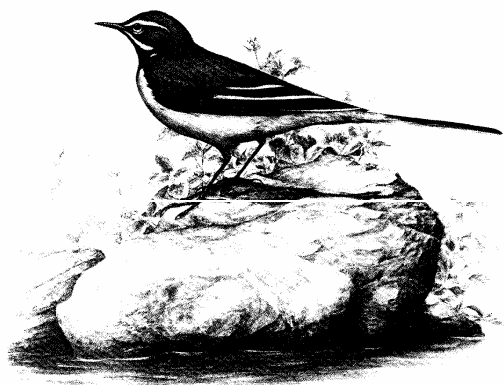


いしたたき



— イシタタキ —

この鳥は主に河川周辺に棲んでいて、いつも尻尾を上下に振るので「イシタタキ」と呼ばれるのです。正確には、セキレイ科の鳥です。日田では普通、ハクセキレイ・セグロセキレイ・キセキレイの3種類が見られます。それぞれ、体の色で区別しています。このうち市内で周年見られるのはセグロセキレイとキセキレイですので、「イシタタキ」とは、この2種類をさすことばです。

花月川の岸边にて

日田の川を考える会 吉田 稔

依頼された原稿のテーマは「花月川に関して」であるが、私の生まれたのは山田町であり、子供の頃から花月川で遊び回っていた訳ではないことをまずお断りしておかねばならない。花月川が私の記憶の中に残るようになっただけは、

5 kmの道のりを西部中学校(三隈中学の前身)に花月川を渡って通いはじめてからである。西部中学校の校歌も「花月(はなつき)の流れに映えて…」ではじまっている。光岡橋からカイツブリの水もぐりをよく眺めたものである。久大線の線



いしたたきは、環境保護の為、再生紙を使用しています。



路に耳をあて、列車の接近していないのを確かめて、渡里の鉄橋を歩いて渡ったりもしていた。高校時代は御幸橋か一新橋、時には城町橋を渡って通学したが、城町橋たもとの牛市のにぎわいと牛糞の匂いが今でも強烈に記憶に残っている。

その頃の花月川は、当時の他の川と同様、護岸工事が現在のように大規模に行われていた訳ではなく、どこまでが河川敷なのかはっきりしないところが多く、川に張りだした家屋もあり、私の友達の家も河畔林の中にあった。水質は当然、当時の方がよかったであろうが、「景観」として見るならば、コンクリートを多用し、生き物にとってはつらい環境となっている現在のほうが、むしろ「まとまった川らしい風景」とも映ろう。

その後、私は城町2丁目に住みつき、日々慈眼山の下を流れる花月川を眺めて暮らしている。そして「日田の川を考える会」の会員としての意識と、自身の趣味を兼ねて数日に一度は日田の川岸をジョギングしている。川を見ながら走るのは確かに気持ちのいいことではある。しかし、川を「批判的に観察」しながら走ると、だんだん怒りと悲しみが蓄積してくる。

ひとつは当然、改修のあり方に関してである。水の中の生き物はもちろん、人も水辺に寄りつけないコンクリートの護岸は見るだけで息苦しくなる。とくに最近の有田川の改修は、生態系の破壊が著しい。護岸には大きな丸石をコンクリートで固めて自然を“演出”し、ラバー堰で淵をつくっているが、ラバー堰の空気を抜いた時には、淵の水は、魚とともに流れ去って岩石の河原が砂漠のように姿を現す。その支流の求来里川は圃場整理により全く淵のない川と化し、魚の安住する場所もない。生き物にはもちろん、見た目にもやさしい川に作り直したいといつも思う。

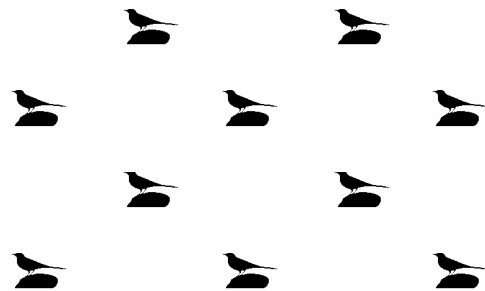
しかし、私とて人間が作りなおした部

分がすべて悪いと思っではない。慈眼山下の「すいで淵」は城内川の通水のために作られた城内井手によって生まれたが、生態系をはぐくみ、また歴史の重みも加わって人々に憩いの場を提供している。つい数年前、もと牛市場だった河川敷が公園として整備されたが、慈眼山の緑や紅葉を背景に、大変味わいのある風景を作っているのはうれしい。

護岸工事と同じくらい気にかかるのは、水質とゴミである。護岸工事は国や県のやったことであるが、水質やゴミに関しては、私達住民が直接責任を負うべき割合がきわめて大きい。ゴミの散らかった河原や濁った水を眺め、一方では「水郷日田」あるいは「山紫水明」ということばを思い浮かべながら岸辺を走る心境は複雑である。

国土交通省は昨年の洪水を機に、巨費を投じて花月川系を改修するという。そのこと自体は大変ありがたいことである。しかし、緊急工事という名のもとに、今までどおりの工法で川岸を固めるということだけは避けて欲しい。否、絶対にそうさせてはなるまい。一度その工事が完成すれば、5年や10年、あるいは20年や30年後でも再改修が行われる保証は、まずないのだから。

桜やつつじの咲き誇る川岸の遊歩道を、ゴミひとつない清流を眺めながら心豊かに走る日を夢見て、今日もわたしはジョグに出る。





筑後川へ発信！水源森林「水の森」

「水の森」の会 事務局長
筑後川流域連携倶楽部 副理事長
森林インストラクター

財 津 忠 幸

見渡せば緑の日田盆地。しかしなぜか市民が森林に親しみ自由に散策のできる山は少ない。江戸中期より植林が進み、日本でも有数の林業地帯として発展、その恩恵によって栄えてきた結果でもある。

よく「森林は二度役に立つ」という。一つには樹木が生き延びることによって授けられる保水機能や産地崩壊の防止、二酸化炭素の吸収など人間の生存を大きく支え、二つ目は伐られて後に材木として役に立つ。

大量の水を蓄える森林の保水機能は別名「緑のダム」と呼ばれ、長期の日照りでも筑後川の水は枯れることなく流れている。

筑後川流域の水の恩恵を受ける人々が、筑後川の水に感謝し、自ら森林づくりを体験しようと、平成十年、日田市のISO14001認証取得を機に、日田市天神町千倉に市有林4haを借り受けて「水の森」の会（会長・駄田井正）を結成し、森林造成を始めた。参加団体は、上流から日田市の「ひた水環境ネットワークセンター」（座長・諫本憲司）、中流・久留米市の「筑後川流域連携倶楽部」（理事長・駄田井正）、下流・大川市の「大川活性化協議会」（会長・鐘ヶ江洋一）、水道水源の縁で「はかた夢松原の会」（会長・川口道子）、サポートする

形で「グリーンパスポート・ネットワーク」（会長・東本高志）の五団体で構成。

すばらしい森林になることを夢見て、平成十一年の春から広葉樹を植え始め、植林・草刈りなどの作業を150人ほどで、毎年三回行っている。

また、林内には多くの広葉樹も残されており、四季を通して楽しめる森林にしようと遊歩道づくりなども行いながら、流域の人々や日田市民が、いつでも自由に森林散策できる山づくりを目指している。

毎年秋には、大川市立三又小学校児童が「水の森」を訪れ、大分西部森林管理署職員の指導で自然観察や木工教室など、森林とのふれあいを楽しんでいる。

いろんな森林活動を通して、筑後川流域の人々が互いに交流・連携を進めることも大きな目的であり、迎える地元千倉部落の方々や日田市のボランティア団体「花一輪の会」によるブタ汁づくりもまたみんなが「水の森」に来る楽しみのひとつでもある。

流域の人々でつくる交流の輪が森林の重要性や、絶え間なく湧き出るきれいな水の恩恵を利用する人々に伝えることができれば、この「水の森」の果たす役割はすばらしい。



写真①は、夏炎天下の下草刈り

写真②は、頂上までの遊歩道作り

—— 「水の森」、植林と花見のお知らせ ——

日時： 平成14年4月14日(日) ※ (予定時間10:30~)

場所： 「水の森」(日田市千倉ダム周辺)

問い合わせは、「水の森」の会事務局長 財津忠幸まで

連絡先：大分西部森林管理署 TEL 0973-23-2161

FAX 0973-23-2163

Email zaitut@ruby.ocn.ne.jp



いしたたきは、環境保護の為、再生紙を使用しています。





ひびきあゆ

大山川の再生（響 鮎の復活）

大山町 森と水ふるさと推進会議 森 和恒

三隈川、大山川の水利権更新をうけて4年間にわたる論戦の結果、最終的に三隈川、大山川河川環境協議会において、平成12年3月15日に大山川の現行毎秒1.5tがMax4.5tに決定したことはご承知の通りです。今振り返ってみると日田市と大山町の行政区を越えて、また官民一体となり取り組み、大きな成果を揚げた事業としては過去に例が無いのではないかと思います。

国の13年度予算が決まり、昨年10月4億2千万の巨額を投じて、私たちが待ちに待った大山川堰の大掛かりな改修工事が始まった。11月26日、関係者による安全祈願祭が50名程の出席者により現地で行われ、住民の夢が現実のものに大きく近づいたのである。又、来期には継続して大山松原ダム直下の改修工事が行われる事も決まったようで、現在の毎秒0.5tが3倍の1.5tになる。我々が一番気になっていたダム直下の最悪の水質も大きく改善されることになる。総論賛成、各論実行、論戦期間の事を考えると正に夢のようだ。

河川環境協議会の討議の中で、九電と民間とのあいだで意見が大きく食い違う事があった。その時三隈川をよりきれいな川にするためにはどうしたらよいかを考えてみた。日田市には、もとより大山川と別に玖珠川が流れ込んでいる。昭和20年代頃は、玖珠川から毎秒15-20t、大山川からは毎秒少なくとも15-20tの水量が三隈川に流れ込み水郷日田にふさわしい清流があった。しかし、現在大山川からは毎秒

3.5t程と思われ、玖珠川からは女子畑発電所と三芳発電所の放水路より合わせて毎秒15t前後の水量が三隈川に流れ込んでいる。問題はこの玖珠川で、上流からよく見ると本来の川に水が流れていないのです。大半が山中隧道である。九重から流れた水はトンネルで北山田まで、北山田から今度は天瀬町、ここからまた最後の女子畑発電所まで暗いトンネルでほとんど外の空気に触れることが無い。要するに空気中の酸素を補給する事なく日田市に流れ込んでいる事になる。この事で、三隈川をこれ以上きれいにする能力は玖珠川では期待できないのです。そのためにも、大山川の水量を増量して欲しいと訴えたのである。しかも、平成9年に玖珠川の水利権更新は終わっていたのです。

この事を行政区を越えて地域住民皆が考え認識しなくてはいけない。川を中心とした自然環境の改善が進む中で、きれいな水、よりきれいな水質、より多くの酸素を含んだ水を下流に流すことが、そこに住んでいる人達の役割である。この機会に、水がきれいになるメカニズムが何なのかを皆で考えたいものです。色々な人達のご尽力で、三隈川、大山川の自然環境が大きく改善される。この自然環境を生かした町づくりを住民全体で考え、もっと大きな夢をかけたいものです。

最後に、日田市、特にひた水環境ネットワークの皆さんのご協力に、心よりお礼を申し上げます。



☆☆公開シンポジウムのご案内 ☆ ☆

主催： 久留米大学産業経済研究所

共催： NPO法人筑後川流域連携倶楽部

テーマ 「福岡都市圏と筑後川流域」

会場 久留米大学福岡サテライト教室

福岡市中央区天神1-1-1アクロス福岡東間5F

TEL 092-737-3111

時間 午後6時 ～ 午後8時

★ 平成14年2月15日(金)

福岡都市圏と筑後川上流域の再生

コーディネーター／ 駄田井 正 (久留米大学教授)

パネラー／ 坂本 紘二 (下関市立大学教授)

諫本 憲司 (ひた水環境ネットワークセンター座長)

川津 潔 (筑後川上流倶楽部代表)

★ 平成14年3月15日(金)

筑後川の流域連携とNPOの役割

コーディネーター／ 西川 芳昭 (久留米大学助教授)

パネラー／ 財津 忠幸 (水の森事務局長)

川口 道子 (博多夢松原の会代表)

下瀬 美彬 (文化経済学会九州部会事務局長)

※ 参加費は無料、参加申込みも不要ですので、お気軽にご参加ください。

事務局よりお知らせ

当センターは、「子どもたちに泳げる川を！」をスローガンに、水環境に関心のある個人や団体で構成され、ネットワークを通して、会員それぞれの考えや活動を広く市民や行政などに伝えながら、より良い日田の水環境をつくれるよう活動しています。

環境問題は1人や2人の努力では解決しません。是非、私たちの活動や思いを理解し、「ひた水環境ネットワークセンター」へのご入会をお願い致します。

(個人・団体にかかわらず入会できます。)

発行：ひた水環境ネットワークセンター

事務局：大分県日田市三本松2-2-16 日田商工会館3F (社) 日田青年会議所内

TEL：0973-24-7150

FAX：0973-22-8265

Email： hita-jc@oitaweb.ne.jp



いしたたきは、環境保護の為、再生紙を使用しています。

